

異文化研究の視座による川端文学の一端

—「夕映少女」を例として—

国立台湾大学 日本語文学科

范淑文

異文化研究に触れる際、国か民族、または宗教を視座とするのが一般的な眼差しであろう。となれば、どうしても外国や民族などが対象となる研究に限られる。しかし、「ある人が所属する文化と異にする文化」というミクロ的定義に従えば、異文化とは、必ずしも外国や違う民族などグローバル的視点に限らなくなる。つまりこの「ある人が所属する文化」とは、他の国や民族ばかりではなく、自国民の社会的な年齢層や歴史的な時代、或は追求される思想的な理想など、様々な要素が可能となる。所謂 **Different culture**—異なる文化—という英語の表現に相通じる。言い換えれば、文学研究の場合は、自分の国の大多数の作家と作風が異なる特定の作家も、特定の作品、特定のキャラクターなども、みな異文化の対象と見なし得るのである。

こうした広義の異文化研究の視座より川端文学の一端——を探ってみることを本稿の主旨とする。普通川端文学の特徴に言及する際、日本的という表現が用いられるが、恐らくそれは表現の美しさや美への執着という美学的な点を捉えてのことと言えよう。確かに女性に向けられた焦点、またそのキャラクターの設定は、他の作家と極めて異なっているのはよく知られている。短編小説「夕映少女」もその典型で、全川端作品に通底する女性——純潔な少女——を描くことがモチーフとされている。

本稿では、「夕映少女」のキャラクターの設定や描写の手法などの分析をとおして、作者が執着しているものを新たに探り、『雪国』に描かれているキャラクターとの共通性及び相違性を明らかにする。それらの類似点を川端文学の特質——日本文学における特異性——と見做し、その相違点を川端文学の中の異質——同作家の作品群にある異文化——と捉え、川端文学に潜む川端文化の側面にアプローチしてみる。